

催馬楽「山城」と歌枕「こまのわたり」

山崎 薫

一、はじめに

催馬楽は、平安期の貴族たちに愛唱された宮廷歌謡である。既に小野恭靖^①の指摘があるように、催馬楽の詞章のことは、盛んに和歌に取り込まれ、音楽としての催馬楽が衰退していく中でも、歌ことはや歌枕として用いられ続けていく。特に、次に掲げる催馬楽「山城」は、平安期以降の数多くの和歌に詞章が踏まえられていることが確認でき、また、『源氏物語』「紅葉賀」巻にも引用されていることが知られている。

山城の こまのわたりの 瓜つくり なやや らいしなや さいしなや 瓜つくり 瓜つくり はれ
瓜つくり 我を欲しと言ふ いかにせむ なやや らいしなや さいしなや いかにせむ いかにせむ はれ
いかにせむ なりやしなまし 瓜たつまでにや らいしなや さいしなや 瓜たつま 瓜たつまでに

(催馬楽「山城」)

こうした文学作品における催馬楽「山城」の用いられ方については、以前にも拙稿^②で論じてきた。「山城」に限らず、催馬楽の詞章のことは、他に用例を見ないものも多く、解釈が定まり難い。催馬楽の詞章が踏まえられた和歌や物語の表現を検討することは、催馬楽の成立期におけることばの意味は解明しえないとしても、平安期以降、催馬楽の詞章がどのように捉えられていったのか、その受容のあり方を明らかにする手掛かりになると考える。

さて、本稿では、催馬楽「山城」の一段目の「こまのわたり」ということばに注目したい。このことばの「わたり」

催馬楽「山城」と歌枕「こまのわたり」

は、催馬楽の注釈においては、「辺」の意で解釈することが通説となっているが、和歌の中では、「渡」の意で用いられ、「狛の渡」という、木津川の渡し場を指す山城の歌枕として捉えられていったと見られる。そこで、次節からは、「山城」の詞章が踏まえられた和歌を中心に検討しながら、この歌枕が生まれた背景について考察していきたい。

二、歌枕としての「こまのわたり」

まず、催馬楽の注釈における「こまのわたり」の解釈について整理してみよう。「こま」という地名に関して、催馬楽の古注釈である、賀茂真淵（一六九七—一七六九）の『催馬楽考』、橘守部（一七八一—一八四九）の『催馬楽譜入文』は、いずれも、平安中期に編纂された古辞書、『和名類聚抄』の記述を引き、「こま」は山城国相楽郡の^{おほこま}大狛と呼ばれた地域であるとする。この説は、近代以降の注釈書においても踏襲されている。大狛という地名は、奈良期の「相楽郡司解」にも「大狛郷」として見え、現在の木津川市山城町上狛から、同町北河原にかけての、木津川右岸の地域だと推定されている。なお、井上満郎が詳細に論じているように、南山城の地は高句麗（高麗）^{こま}系^まの渡来人の居住地であったと見られ、それが地名の由来となったと考えられる。

「わたり」についても、諸注釈における解釈は概ね一致しており、「辺」、すなわち、「周辺」の意と捉えられている。ただし、今井似閑（一六五七—一七二三）は、『万葉集』⁷ 解釈のための編注書である『万葉緯』の催馬楽「山城」の注釈において、「こまやまに なくほととぎす いづみがは わたりをとほみ ここにかよはず」（『万葉集』巻第六 雑歌 一〇五八 讀「久迹新京」歌 反歌二首）を引きながら、「山城」の詞章の「わたり」の部分に「渡」という漢字を傍記している。また、『催馬楽譜入文』は、江間氏親（生没年不詳、元禄期）による『南遊行囊抄』の「狛村ハ、自路左」方、行程十余町ニ在。或ハ狛ノ大里村トモ云。此邊狛ノ郷也。木津ノ渡ニ近シ。名所也。昔熟瓜ノ名物ヲ出シタル名所ナリ云云……」という記事を引用し、さらに『南遊行囊抄』からの孫引きで『万葉集』一〇五八番歌を掲げた上で、「か、れば古歌に狛の渡とよめるも、此木津川の舟渡しの事也。今此にわたりと云はあたりの轉語也。混ずべからず。」と注記して

いる。この記述からは、和歌に詠まれる「こまのわたり」の「わたり」については、「渡」、すなわち、「渡し場」の意で解釈されるのだという主張が読み取れる。

そこで、「こまのわたり」が詠み込まれた和歌について検討してみたい。次に、管見の限りの用例（全十二例）を、歌集の成立時代順に掲げる。

① 夏

大監物なる時、御こきましに内侍所にまいりたりしに、いとおかしけなるこうりを、つゝみていたしたりしかは
山城の駒のわたりを見てし哉 うりつくりけん人のかきねを

〔兼盛集〕 I 六

② 三位国章、ちひさきうりを扇におきて、藤原かねのりにもたせて、大納言朝光が兵衛佐に侍りける時、つかはし

たりければ

おとにきくこまの渡のうりつくりとなりかくなりなる心かな

返し

さだめなくなるなるうりのつら見てもたちやよりこむこまのすきもの

〔拾遺集〕 卷第九 雑下 五五七・五五八

③ 一番 左右

あけてだにあふはかりなきくれなゐは立田の山のみぢなりけり
しきしまや駒のわたりもおしこめてからくれなゐのみぢしにけり

〔或所紅葉歌合〕 一・二二

④ 山城守なりける人のめを、ある人忍ひても申すときこへけるを、程もなくかれくになりぬと聞てつかはしける

石川やはなたのをひのなかたえは 駒のわたりの人にかたらん

〔散木奇歌集〕 I 一二九〇

⑤ ある女のもとにいきたるに、うりのかたかきたるあふきかみをえさせたりしかは
うりつくる駒のわたりに尋きて 君かたにもなる心かな

〔基俊集〕I 一七七

⑥ 山しろのこまのわたりのうりよりも つらき人こそたゝまほしけれ

〔清輔朝臣集〕I 二七七 寄瓜恋

⑦ 保延三年、侍従中納言もとへ、なとうりはたはぬそと申たりしかは

中納言

とき（まゝ本）のよに君かふくほうみゆるかな たゝいまひとのこれをたひたる
かへし

ふくほうのけふよりみゆるみにしあれは うりまろひしてよろこひそする

又中納言のもとへ、二三日ありて

昨日けふうりもみえねはひとしれす こまのわたりをおもひこそやれ

かへし

中納言

かきりなく君かとふへきためしには 山しろやまとゝもにまいらす

又二三日はかりありて、うりやかみおこすとありしか、みえさりしかはかく申、

魚の網籠の蹄のみえぬかな みつにかくれてそらにのほるか

かへし

魚の網籠の蹄を献せるを 白波のためかすめられつも

〔源大府卿集〕I 四一〜四六

⑧ うらやましこまのわたりにつくるうりのふしならふ（さ）をはよそにのみゝる

〔伝西行筆出雲切〕殷富門院大輔集〕六

⑨

瓜

欲識東陵味 青門五色菰 秦東陵侯邵平、くにやぶれて、布衣そへぐして司をのがれて後、長安城の東門のほとりに菰をつくれり、うり五色あり、味ひ殊に勝れたり、東は青也、又遼東盧江燿焯のたね熟しておほきなる事如斛、青うり如三斗、又蜀郡つねにあたたかなるが故に冬うりあり、又君がためには四にけづり、諸侯のためにはなかよりすと云へり

門田にはいつつの色と見しかども心のたねはふたつなかりき

竜蹄遠珠履 菰にあまたの名あり、女臂菰、羊角菰、竜蹄菰と云へり、菰田に履をとらずと云へり、くつをおとしてとらんとすれば、菰をとらんとするににたり

旅人のくつの通ひ路こころせよこまのわたりに露おちぬとも

(『百詠和歌』五五・五六)

⑩

泉川こまのわたりのとまりにもまだ見ぬ人の恋しきやなぞ

(『夫木和歌抄』一〇八九八 いづみがは 題しらず よみ人知らず)

⑪

やましろのこまのわたりの紅葉葉をからにしきとや人はみるらん

(『夫木和歌抄』一二二二九 渡 藤原為真)

⑫

渡時雨

笠置山さしもくもらていつら川(ツツ) こまの渡はふる時雨かな

(『草根集』五「正徹Ⅳ」四二七二)

このうち、平安中期から鎌倉前期頃にかけて詠まれている①②⑨においては、「わたり」が「辺」として捉えられているのか、「渡」として捉えられているのか、歌意からは判然としない。ただし、『和泉式部集』に、次のような和歌が収められている。

夕くれに、ちみさきうりを齋院より給はせたるに、かきつけてまいらす

催馬楽「山城」と歌枕「こまのわたり」

夕きりはたつをみましやうりふ山 こまほしかりしわたりならては

『和泉式部集』I 五八〇

この和泉式部（生没年不詳、平安中期）の歌にも、催馬楽「山城」の詞章が踏まえられていると見え、「うりふ山」の「うり」の縁語として、「こまほし」には「来ま（ほし）」と地名の「狛」が掛けられている。この歌は、「行きたかった（狛の）あたりでなかったならば、瓜生山に夕霧が立つのを見たいと思ったでしようか」と解釈されよう。この歌における「わたり」は、「周辺」の意で捉えられていると考えられる。また、歌学書に目を向けると、藤原清輔（？―一二七七）の『和歌初学抄』^⑩、上覚（一二四七―一二二六）の『和歌色葉』^⑪、順徳天皇（一一九七―一二四二）の『八雲御抄』^⑫の「瓜生山」に対する注記も注目される。『和歌初学抄』は「コマノワタリニアリ ウリニソフ」、『和歌色葉』は「こまのわたり」にあり、「八雲御抄」は「こまのわたり也。清輔抄。」として、やはり、「瓜生山」が「こまのわたり」にあると捉えており、「わたり」は「周辺」の意味であると解釈されているようである。

このような解釈が見られる一方で、^⑩^⑫の歌においては、明らかに「わたり」が「渡」の意で詠まれている。^⑩の歌において、「わたり」は、「泉川」「とまり（泊）」との縁語として詠まれており、^⑫の正徹（一一三八―一四五九）の歌についても、「渡時雨」の歌題で詠まれていることから、「こまのわたり」は、いずれも「渡し場」として捉えられていると考えられる。また、^⑪については、歌意から「わたり」が「渡」として詠まれているとは断定できないものの、注目されるのは、『夫木和歌抄』における分類である。藤原長清（生没年不詳、鎌倉末期）撰の『夫木和歌抄』には、「こまの渡、山城」という項目があり、^⑪はここに分類されているのである。なお、この項目には、^④の歌も挙げられている。『夫木和歌抄』の分類において、「渡」と表記されているものは、すべて渡し場の歌枕を指しているため、少なくとも、『夫木和歌抄』の編纂において、^④と^⑪の歌の「わたり」は、「渡」として捉えられたと考えられる^⑬。

このように、「こまのわたり」を渡し場として分類することは、『夫木和歌抄』と同時期に編纂されたとされる『歌枕名寄』にも見られる。ここでは、^②の藤原朝光（九五―九九五）の歌が、山城国の「渡」の項目に挙げられている。なお、『歌枕名寄』以前に成立した名所歌集である、能因（九八八―？）の『能因歌枕』^⑮、藤原範兼（一一〇七―一一六五）

の『五代集歌枕』⁽¹⁷⁾、及び、歌枕について記す藤原清輔の『奥義抄』⁽¹⁸⁾、前述の『和歌初学抄』、『和歌色葉』、『八雲御抄』などにおいては、前述の「瓜生山」への注記を除いて、「こまのわたり」という歌枕は挙げられていない。

以上のことから、和歌における「こまのわたり」の「わたり」は、平安中期から鎌倉前期頃までは、「周辺」の意で捉えられていた可能性が高いが、鎌倉末期頃から、「渡し場」の意で解釈され、山城国の歌枕とされるようになっていったと考えられる。後者の解釈は、本節の冒頭で触れたように、近世以降の催馬楽の注釈書においては通説ではない。しかしながら、一方で、『催馬楽譜入文』の、歌謡の詞章と和歌とではそれぞれ意味が異なるという主張も、「こまのわたり」ということは催馬楽由来の歌枕である可能性が高いことを考慮すれば、疑問の余地がある。和歌における「こまのわたり」の詠まれ方の変遷は、催馬楽「山城」の「こまのわたり」の解釈の変遷を反映するものであり、鎌倉末期頃に、「こまのわたり」を木津川の渡し場として、「狛の渡」と捉える解釈が生まれたとみるべきであると考える。

それでは、なぜこのような解釈が生まれたのであろうか。また、「狛の渡」とは、どの地点が想定されていたのであろうか。次節以降では、「狛の渡」の位置を検討し、「わたり」が「渡」と解釈されていた背景について考察してみたい。

三、「こまのわたり」と木津川

飯島一彦⁽¹⁹⁾が指摘しているように、催馬楽の諸注釈において「狛」の地と推定されている山城町上狛から同町北河原にかけては、「東から流れてきた木津川が大きく北向に屈曲する北岸に当たる土地」にあたる。このことから、飯島は、「こまのわたり」が木津川の渡河点を意味する可能性があることに触れている。

この示唆は注目されよう。なぜなら、次の『日本三代実録』⁽²⁰⁾の記事から、木津川の渡し場が山城町上狛に存在していたことが読み取れるからである。

山城国泉橋寺申牒曰。故僧正行基。五畿境内建_レ立四十九院。泉橋寺是其一也。泉河渡口。正當_レ寺門。河水流急。橋梁易_レ破。每_レ遭_二洪水_一。行路不_レ通。常在道俗合_レ力。買_二得大船二艘小船一艘_一。施_二入_一寺家。以備_二人馬之濟

催馬楽「山城」と歌枕「こまのわたり」

渡^一。

〔日本三代実録〕卷二十八 貞観十八年（八七六）三月三日

泉橋寺は、行基（六六八―七四九）が木津川に泉大橋を架した際に建立した寺であり、現在の山城町上狛、木津川北岸の程近く位置する。この記事によれば、その寺門の前に、木津川の渡し場が位置したらしい。この「泉河渡」として知られた木津川の渡し場は、『南遊行囊抄』や『万葉緯』が引く、次の『万葉集』一〇五八番歌とも深くかかわっている。

狛山 鳴鶴公鳥 泉河 渡乎遠見 此間尔不通（一云、渡遠哉 不通有武）

こまやまに なくほととぎす いづみがは わたりをとほみ ここにかよはず

（一云、わたりとほみか かよはずあるらむ）

〔万葉集〕卷第六 雑歌 一〇五八 讚久迹新京歌 反歌二首

この歌の「こまやま」について、井上満郎は、「恭邇新京を讀むる歌」への反歌として詠まれていることから、「木津川右岸、古北陸道の川を渡ってすぐの地、現在の上狛あたりをいうもの」であろうと推定している。「わたりをとほみ」と詠まれるのも、『日本三代実録』の記事にあるように、「泉河渡」がこの地にあったからであると考えられる。少なくとも、『南遊行囊抄』は、『万葉集』一〇五八番歌と相楽郡の「狛」の地にあった木津川の渡し場（「泉河渡」）とを関連づけたからこそ、「狛村」について「木津、渡二近シ」と説明し、歌の引用を付したのである。そして、『万葉緯』は、催馬楽「山城」の「こまのわたり」もまた、この「泉河渡」であると捉えたと考えられる。

「狛の渡」という歌枕の形成には、このように、『万葉集』一〇五八番歌を介した、「泉河渡」＝「こまのわたり」とする解釈がかかわっていると見られる。『天木和歌抄』や『歌枕名寄』が成立したと考えられる鎌倉末期は、先行研究²³において指摘されるように、仙覚による『万葉集』研究が受容されていく時期にあたる。特に『歌枕名寄』については、歌枕の項目の形成に万葉歌の影響が大きいことが明らかにされており、『万葉集』一〇五八番歌は、山城国の「泉河」「狛山」の項目にそれぞれ収められている。このように、万葉歌の地名が歌枕として整理される中で、『万葉集』一〇五八番歌の表現と類似した「こまのわたり」も、相楽郡の「狛」に存在した木津川の渡し場を指すことばとして理解されていたので

はないか。

さらに、実際に、木津川の付近で、瓜の栽培がさかんに行われていたらしいことも、「泉河渡」と「こまのわたり」を同一視する要因になったと考えられる。中古から中世にかけての南山城における瓜の栽培の様子については記録が残っておらず、催馬楽および和歌の表現から推測せざるをえないが、例えば、大中臣能宣（九二一―九九一）の私歌集『能宣集』には次のような歌が見られる。

A 或所より、かはゐのその、うりをおこすとて、かくかけり

なかれてもかはゐのその、みつほそち なみのみたてるうりとこそみれ

B まらうとめきたる人まうてきて、人のもとに、ちひさきうりに、かをかきておこせたり

なかれてもうはひのその、みつほそち ひとりのみすのうりとしらなむ

これか、へし、てとあれは

うみわたりかはひのそのになるなれば なみのみたてるうりにやあるらん

〔『能宣集』Ⅲ 二九七・二八〇〕

この歌は、A西本願寺蔵本（『能宣集』Ⅰ）とB書陵部蔵本（『能宣集』Ⅲ）とで大きく異同があり、書陵部蔵本にのみ返歌が収められている。歌意は難解であり、先行研究⁽²⁴⁾においても解釈が十分になされていない歌であるが、既に拙稿⁽²⁵⁾で論じたように、「なみのみたてる」の「たてる」には、「波が」立つ⁽²⁶⁾の意と、瓜の縁語として、「（瓜の葛を）断つ（＝収穫する）」の意が掛けられていると見られる。また、「みつほそち」は熟瓜のことを指し、後掲の『藤六集』七番歌や『古今著聞集』の歌の表現などからも、「みつ」には「水」が掛けられるとともに、「なかれても」には、水に流れることと、熟しすぎて果汁が流れ出ることが意味されていると考えられる。これらを踏まえて、次に試訳を掲げる。

A 試訳 あるところから、樺井^{かほい}の園の瓜を寄越すというこゝで、このように書いてあった。

催馬楽「山城」と歌枕「こまのわたり」

川の水に流れても（熟しすぎて果汁が流れても）、樺井の園の熟瓜ですから、それは、波だけが立って、波だけが収穫した瓜だとみてくださいよ。

B 試訳 客人のようなひとがやって来て、人のもとに、小さい瓜に顔を書いて寄越した。川の水に流れても（熟しすぎて果汁が流れても）、樺井の園の熟瓜ですから、せめてひとりはそれに目をつぶって（見ないで）、瑞々しい瓜だと分かってほしいことです。

これの返歌をするということ、

海を渡り（川に流れ）、樺井の園に実ったのだとすれば、それは、波だけが立って、波だけが収穫した瓜なのでしょうか。

これらの歌からは、「樺井」という地に瓜園があったことがうかがえる。「樺井」は、やはり山城国の地名であり、現存するこの名を含んだ樺井月神社の伝来から、かつての綴喜郡、現在の京都府田辺町大住周辺に位置したと推測される。

一方で、注目されるのが、「樺井渡」と呼ばれる木津川の渡し場の存在である。次のような記事が、平安中期に編纂された『延喜式』に見える。

凡山城国ノ泉河ノ樺井渡瀬者、官長率^二東大寺ノ工等^一、毎年九月上旬^二造^一假橋^二。

（『延喜式』雜式）

既に先行研究⁽²⁸⁾においても指摘されているように、近世の多くの地誌においては、この「樺井渡」を、先に掲げた『日本三代実録』に見える、「狛」の地の「泉河渡」と同一のもの、すなわち別称であるとして捉えている。この説の真偽は定かではないが、「樺井渡」が、相楽郡に位置したとしても、綴喜郡に位置したとしても、木津川の渡し場であったことは変わりなく、また、『能宣集』の歌の表現からは、「樺井」の「かは」に「川」が掛けられているとはいえ、瓜の栽培が木津川近辺で行われている様子が読み取れる。近世の地誌に見られる、「泉河渡」と「樺井渡」を同一とする説は、いずれ

も瓜の名産地であるということから提唱された可能性もあろう。

前節に掲げた⑦も含め、瓜が川や海とともに詠まれる例は、『能宣集』以外にも次のように多く見られる。^⑩

人のもとにいきたるに、ほそちをくひけるに、しとみをたて、かうしけるけしきをみて

みなかみにせきなど、めそ水ほそき、うかりかは、しもにそなかるといふなる

〔藤六集〕七

堀河院御時うりふねかきいたりけるをみて

肥後君

うりふねはうみすきてこそまいりたれ

まいりたりときこしめして、御前にめされて、つけよとおほせことありければ、つかうまつりける

なみにふられてみなそこにみゆ

〔散木奇歌集〕I 一五六一a・一五六一b

暁行法印、人のもとへまかりたりけるに、瓜をとりいでたりけるが、わろくなりて、水ぐみたりければ、よめる、

山しろのほぞちと人や思らん水ぐみたるはいさご成けり

人々あつまりて、うりをくひける所にて、或人、萬法はみな空なりといふ法間をいだしたりけるをき、て、寂蓮法師よみ侍ける、

なにもみなくうになるべき物ならばいざこのうりにかはものこさじ

〔古今著聞集〕六三三「暁行法印並びに寂蓮法師瓜の歌を詠む事」四八三頁

こうした瓜と川・海との結びつきについては、民俗学見地からの詳細な検討がなされている。水分量の多い瓜は、水の恵みの象徴として神聖視され、日本の七夕伝説における天の川とも深くかかわっていることが指摘されている。和歌において川や海を流れる瓜が繰り返し詠まれるのは、確かに、網野善彦が述べるように、「漂流する仏物・神物」としての瓜のイメージが反映されているからであろう。一方で、実際に、木津川のある南山城を中心として、川の周辺で瓜が栽培されることが多く、また、都にもたらされる際に舟で運搬されることがあったからこそ、これだけ多くの瓜と川・海が結び

ついた歌や伝説が残っているとも言えるのではないか。

以上のように、「こまのわたり」を「こまの渡」として捉える解釈が生まれたのは、『万葉集』一〇五八番歌の表現も影響し、「狛」の地にあった「泉河渡」と「こまの渡」とが同一視されるようになったからだと考えられる。近世においては「泉河渡」の別称ともされる「樺井渡」のあった「樺井」の地にも瓜園が存在したと見られることから、実際に木津川付近では瓜の栽培が盛んであったと推測され、そのことも「わたり」が「渡」として木津川に結び付けられる要因となつたと捉えられよう。

四、「こまのわたり」と「駒の渡」

続いて、催馬楽「山城」の実際の演奏が、「こまのわたり」の「わたり」を「渡」とする解釈に繋がった可能性について検討してみたい。

「山城」に限らず、催馬楽の演奏記録は非常に乏しく、演奏の実態については未だ十分に明らかになっていない。近年、飯島一彦^③が、藤原宗忠（一〇六二—一四一）の『中右記』^④に見られる、次の「山城」の演奏記事について詳細に論じている。

徹明之後事了、舞人馳御馬、欲下坂間陪從等申上云、使取拍子可歌山城者、予暫辭退、重申上云、知催馬樂使依為神事、多取笏〔拍〕子、近者則備中守政長（源）臣取拍子、予懋取拍子歌山城、……………

〔中右記〕嘉保二年（一〇九六）三月二十三日（石清水臨時祭）

この記事には、宗忠が、石清水臨時祭の下山の際、求められて催馬楽「山城」を歌唱したことが記されている。飯島は、石清水八幡宮が、摂津国と山城国との境界に位置することに注目し、「石清水八幡宮の社頭を出て坂を下り、境界領域から日常の領域（すなわち山城国）へ越えていくときに、これから訪れる山城という土地の名前を歌い上げることが必要だった」と、この場で催馬楽「山城」が歌われた理由について結論付ける。非常に重要な指摘であるが、一方で、石

清水八幡宮が相楽郡の「狛」の地と離れていることについて、「歌詞の内容は遠く離れた「狛のわたり」を示しているも「山城」という地名を歌うことで充分だったのである」と、「山城」ということば以外の詞章は、この演奏にかかわらないとしている点については、検討の余地があると考ええる。

なぜなら、『中右記』の記事に「舞人馳御馬」とあるように、この演奏の際、舞人たちが馬を走らせているということが看過できないからである。既に拙稿で論じたように、催馬楽「山城」の詞章における「こま」は、平安中期における和歌や『源氏物語』において、しばしば、「駒」との掛詞として用いられている。こうした表現が定着する中で、「こまのわたり」が「駒のわたり」として捉えられた時、「わたり」ということばには「渡」ということばが重ねられた可能性があるのではないか。次に掲げる四条宮主殿（生没年不詳、平安中期）の私歌集『主殿集』の歌の「こまわたりこし」のように、「駒の渡」、すなわち、「馬が（ある境界を）渡る」という意味で捉えられた可能性である。

となりなるむまの允のいへにあるおとこのしのひてかよふを、しりかほにいむとをもひていひよりし
ゆめくよくこまわたりこしあふさかの　せきのしみつにかけみすなきみ
返し

そこかけやきみはみてけんあふさかの　せきのし水みつのきよきわかみを

（『主殿集』一八・一九）

また、『中右記』の演奏記録にかなり先行するが、催馬楽「山城」の演奏が行われた例としては、他に天徳四年（九六〇）の内裏歌合がある。『群書類従』所収の仮名日記には、次のように、「安名尊」、「桜人」、「葦垣」、「山城」という四曲の催馬楽が演奏されたことが記録されている。

右近少将きよとを。たかみつ。きんまさは歌うたふ。かちかたそうてうをふきて。あなたうとうたふ。つきに右
さくら人うたふ。左うたへは右はやみぬ。かたみにそあそふ。左あしかきうたふ。右やましろのこまのわたりう
たふ心あるへし。……

（『天徳内裏歌合』）

ここで注目されるのが、「山城」のみ、「やましろのこまのわたり」という形で記されている点である。「うたふ心あるべし」という表現から、「山城」の全てを歌わず、詞章のうち、冒頭の部分だけを歌ったことを意味する可能性もあろうが、いずれにせよ、催馬楽「山城」の「やましろのこまのわたり」というフレーズが、特によく知られていたことを反映していると考えられる。

『中右記』に見られる、石清水臨時祭の際の催馬楽「山城」の演奏も、「山城」ということばだけではなく、「やましろのこまのわたり」という詞章が、「山城の駒の渡」として掛詞的に捉えられ、摂津国から「山城」国へと「駒」が「渡る」様子が重ね合わされたからこそ行われたのではないか。

石清水臨時祭における催馬楽「山城」の演奏は、飯島論で指摘されているように、後の時代においても恒例とされていたようで、平信範(一一二—一一八七)の『兵範記』⁽³⁷⁾などにも記録が見られる。鎌倉末期頃から、「こまのわたり」の「わたり」が、「辺」ではなく「渡」として捉えられるようになったのは、このような、「こま」を「駒」の掛詞として捉える表現の延長線上にある、石清水臨時祭での「山城」の歌われ方もかわっている可能性が考えられる。

五、結び

本稿では、催馬楽「山城」の詞章の「こまのわたり」ということばが、和歌においては「狛の渡」という山城国の歌枕になっていく点に注目し、その背景について論じた。近世以降の催馬楽の注釈においては、「わたり」は「周辺」を意味する「辺」と解釈されるのが通説であり、また、和歌においても、平安中期頃から鎌倉初期頃までは「辺」と解釈されていた可能性が高い。ところが、鎌倉末期以降の和歌においては、「わたり」は「渡」として明確に捉えられ、木津川の「渡し場」の意で用いられていく。このような解釈が生まれた要因には、以下のことが考えられる。

一つは、山城国の相楽郡の「狛」の地(現在の木津川市山城町上狛)に、「泉河渡」として知られる木津川の渡し場が存在したことである。中世における『万葉集』受容の過程の中で、「こま山」と「いづみがは」の「わたり」を詠んだ

『万葉集』一〇五八番歌の表現がこの地の歌枕として整理されていき、類似した地名である「こまのわたり」も、この木津川の渡し場としてみなされるようになったと考えられる。さらに、南山城においては、木津川付近で瓜の栽培が盛んに行われていたことが推測され、このことも、瓜の名産地である「こまのわたり」と木津川が強く結びつけられていく結果になったと言えよう。

もう一つは、催馬楽「山城」が、中世において岩清水臨時祭の下山の際に演奏されていたことである。平安中期以降、和歌や『源氏物語』において、「山城」の詞章の「こま」が、「駒」の掛詞として用いられていることから、「こまのわたり」は「駒の渡」として捉えられ、馬が社頭から坂を駆け下りる様子、すなわち、摂津国から「山城」国へと「駒」が「渡る」様子を重ね合わせられて歌われていた可能性が高い。「山城」の演奏の場で、「わたり」という詞章が掛詞的に捉えられていたことも、「こまのわたり」を「狛の渡」とする解釈の形成に影響を及ぼしたと考えられる。

冒頭でも触れたように、催馬楽の詞章は、催馬楽が徐々に演奏されなくなる中でも、和歌や物語に取り入れられている。また、その和歌や物語の表現を説明するために、中世以降、注釈書や歌学書などで詞章の解釈が試みられていくと見られる。

このように、宮廷の文化・文学に影響を与え続けるのにもかわらず、中世以降の催馬楽の詞章を用いた表現の変遷、及び、詞章の解釈の変遷については、これまでほとんど見通されてこなかった。本稿も、その一端を明らかにしたに過ぎないが、特に、和歌における催馬楽の受容については、類似した表現を多く持つ『万葉集』歌の受容と深いかかわりがあることが推測される。「こまのわたり」についての記述を持たないため、本稿では取り上げなかったが、例えば、藤原顕昭（生没年不詳、平安末期）の『袖中抄』は、他の中世の歌学書に比べて、催馬楽などの宮廷歌謡に関する記事を数多く含んでいるという特徴がある。先行研究^⑧において指摘されているように、顕昭の歌謡のことはへの興味は、『万葉集』を代表とする「古典」との繋がりを歌謡に見出したからだと考えられる。今後の課題として、「山城」以外の催馬楽由来の歌ことば・歌枕の詠まれ方、歌学書における捉えられ方についても、検討を続けていきたい。

※催馬楽「山城」の詞章は、天治本『催馬楽抄』（東京国立博物館蔵「e国宝」<http://www.emuseum.jp/>）に拠った。催馬楽「石川」の詞章は、鍋島家本『催馬楽』（鍋島報効会 徴古館蔵 上野学園大学日本音楽史研究所蔵の紙焼き（カラー）を参照）に拠った。いずれも、適宜、拍子記号、注記などを省き、通行の漢字かな交じり文に校訂した。

※和歌・歌合の検索と引用は、「日本文学WEB図書館」(<http://www.kotenlibrary.com/>)「和歌&俳諧ライブラリー」内の『新編国歌大観』に拠った。ただし、私家集歌については、同ライブラリー内の『私家集大成』に拠った。

※『古今著聞集』の本文は、『日本古典文学大系八四』（永積安明 島田勇雄 校注 岩波書店 一九六六）に拠った。
※漢文資料の訓点・傍記等については、注で示した引用元に従った。

[注]

- (1) 小野恭靖「催馬楽出自の歌ことば」〔韻文文学と芸能の往還〕和泉書院 二〇〇七。
- (2) 拙稿「平安期における催馬楽「山城」——「瓜たつ」の解釈をめぐる——」〔日本歌謡研究〕五六 二〇一六・一二）、拙稿「源氏物語」「紅葉賀」巻の催馬楽引用——源典侍の物語における「こま」の繋がり——」〔中古文学〕一〇〇 二〇一七・一一）。
- (3) 『賀茂真淵全集 第二』（国学院編輯部編 賀茂百樹 校訂 吉川弘文館 一九〇三）に拠った。
- (4) 『橘守部全集七』（橘純一編 東京美術 一九六七）に拠った。
- (5) 東京大学史料編纂所 (<http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/index-j.html>) 「奈良時代古文書フルテキストベース」に拠った。
- (6) 井上満郎「古代南山城と渡来人——馬場南遺跡文化の前提——」〔京都府埋蔵文化財論集 第六集——創立三十周年記念誌——〕京都府埋蔵文化財調査研究センター 二〇一〇。
- (7) 「国会国立図書館デジタルコレクション」(<http://dl.ndl.go.jp/>) より、国会国立図書館蔵本 (862,77) を参照した。また、神宮文庫蔵『催馬楽』(3-1972) など、今井似閑の書写奥書を持つ催馬楽譜にも同じ注の書入れが見られる。
- (8) 歌集の成立時代については、「日本文学WEB図書館」(<http://www.kotenlibrary.com/>)「和歌&俳諧ライブラリー」内の『新編国歌大観』『私家集大成』に従った。
- (9) ②については、底本（京都大学附属図書館所蔵中院本）において「わたり」に「渡」の漢字が当てられている。この本は、中院通茂（一六三三—一七一〇）による藤原定家（一一六二—一二四一）自筆本の臨写本であり、定家の「わたり」の解釈を示しているとも考えられるが、なお検討を要する。
- (10) 『日本歌学大系 第二卷』（風間書房 一九五六）に拠った。
- (11) 『日本歌学大系 第三卷』（風間書房 一九五六）に拠った。

- (12) 『日本歌学大系 第三卷』(風間書房 一九五六)に拠った。
 (13) ただし、「瓜生山」は、次の藤原元真(生没年不詳、平安中期)の歌にあるように、志賀の山越えの際の通過地点である、比叡山の南山麓(現在の京都市左京区北白川)に位置するとされ、相楽郡の「こま」とは大きく離れている。

しかの山こえにみちのかけに、しか

うりふやまもみちのなかに鳴鹿の 声はふかくもきこえ
 くるかな

『元真集』「西本願寺藏三十六人集」もとさね(一六六)のことについて、『歌ことば歌枕大事典』(日本文学WEB図書館)「辞典ライブラリー」内の久保田淳による「瓜生山」の項では、「これは瓜を取り合わせて詠む作例から、催馬楽「山城」に関連づけ、山城国相楽郡狛の地と考えたのであろう」と、催馬楽の影響を指摘している。

- (14) ⑩も『夫木和歌抄』に収められている歌であるが、この歌は、「いづみみかは、泉、山城又近江」の項に分類されている。また、『夫木和歌抄』には、若干の異同がある形で①も収められているが、この歌は「瓜」の項に分類されている。

- (15) 『日本歌学大系 第一卷』(風間書房 一九五七)に拠った。
 (16) 『日本歌学大系 別巻二』(風間書房 一九五九)に拠った。
 (17) 注(15)の前掲書に拠った。

(18) 「こまのわたり」を詠んだ早い例である①の平兼盛(?-九九一)の歌と②の藤原国章(?-九九五)の歌は、「山城」の詞章にある「うりつくり」ということはも詠み込んでおり、明らかに催馬楽「山城」を踏まえている。また、④の源俊頼

(二〇五五-二二九)の歌も、次に掲げる催馬楽「石川」の詞章の引用が見られ、二種の催馬楽を取り合わせるところから、やはり催馬楽「山城」の詞章が意識されていると捉えられる。

石川の 高麗人^{たから}に 帯を取られて からきくいする い
 かなる かなる 帯ぞ 縹の帯の なかはたいれるな
 か かやるか あやるか なかはたいたれたるか

(催馬楽「石川」)

- (19) 飯島一彦「越境の歌謡——催馬楽「山城」を手掛かりに——」『日本歌謡研究』五六(二〇一六)。

- (20) 『国史大系 第四卷』(吉川弘文館 一九六六)に拠った。

- (21) 注(6)の前掲論文。

- (22) 小川靖彦『万葉学史の研究』(おうふう 二〇〇七)など。

- (23) 樋口百合子『歌枕名寄』伝本の研究 研究編 資料編(和泉書院 二〇一三)。

(24) 『私家集注釈叢刊七 能宣集注釈』(増田繁夫 校注・訳 貴重本刊行会 一九九五)においては、Aの歌を「流れてはいても、樺井の園の水の流れは、波ばかりの立っている、この並んだ瓜のように見える」と現代語訳している。

- (25) 拙稿「平安期における催馬楽「山城」——「瓜たつ」の解釈をめぐって——」『日本歌謡研究』五六(二〇一六)。

(26) 『和名類聚抄』(『古写本和名類聚抄集成 第二部』馬淵和夫 編著 勉誠出版 二〇〇八)に、「保曾知俗用熟瓜二字或説極熟帶落之義也」とある。

- (27) 『日本歴史地名大系』(平凡社「ジャパンナレッジ」)

<http://japanknowledge.com>)の「榊井月神社」の項。

- (28) 『校訂 延喜式 下巻』(皇典講究所 全国神職会 校訂 大岡山書店 一九三二)に拠った。
- (29) 注(27)の前掲書の「木津川」の項。
- (30) ⑦の歌において、瓜が「魚の網」「龍の蹄」と表現されているのは、⑨の歌と同様、次に掲げる唐代の李嶠の詩や、『廣志』などの漢籍に見える瓜の名前が踏まえられているからである(『百詠和歌注』(朽尾武編 汲古書店 一九七九)に拠る)。
- 欲識東_レ陵味 青_レ門五_レ色瓜 龍_レ蹄遠珠_レ履 女臂動_二金花_一六_レ子方呈_レ瑞 三仙實可_レ嘉 終期_レ奉_レ締紘 謁_レ帝_レ俾_レ非_レ睽 (『李嶠百詠』瓜)
- 瓜之所_レ出以_二遼東廬江敦煌之種_一為_レ美有_二烏瓜魚瓜狸頭瓜蜜筍瓜女臂瓜龍蹄瓜羊核瓜_一…… (『廣志』)
- また、『藤六集』七番歌や『古今著聞集』の歌においては、「かは」には「川」と「瓜の」皮」とが掛けられ、瓜の縁語となっているようである。無論、こうした漢籍の影響や、修辭上の結びつきも、和歌において瓜が川や海とともに詠まれる一因となっていると考えられる。
- (31) 『いまは昔むかしは今 第一巻 瓜と龍蛇』(網野善彦 大西廣 佐竹昭広編 福音館書店 一九八九)。
- (32) 網野善彦『漂流物』(注(31)の前掲書)。
- (33) 注(19)の前掲論文。
- (34) 東京大学史料編纂所「古記録フルテキストデータベース」に拠った。
- (35) 拙稿「『源氏物語』「紅葉賀」巻の催馬楽引用——源典侍の物語における「こま」の繋がり——」(『中古文学』一〇〇二〇一七・二一)。
- (36) 『群書類従 第十二輯 和歌部』(続群書類従完成会 一九六〇)。
- (37) 保元三年(一一五八)三月二十三日の石清水臨時祭の記事に、「次使下、陪從歌山城、乗松明降山路」とある(『増補史料大成十九 兵範記二』(臨川書店 一九六五)に拠る)。
- (38) 小野恭靖「和歌と催馬楽」(注(1)の前掲書)、田林千尋「平安期歌謡研究における顕昭著『袖中抄』の位置付け」(『京都大学國文學論叢』二七 二〇一一・三)。

The *Saibara* Song *Yamashiro* and the
Poetic Location *Koma no watari*

YAMASAKI Kaoru

Saibara 催馬楽 are a genre of sung court lyric popular during the Heian period. Among these, considering the large number of *waka* poems that make reference to its lyrics, the *saibara* song *Yamashiro* 山城 seems to have been particularly well-liked. One phrase deriving from these lyrics is the “poetic location” (*utamakura* 歌枕, lit. “poem-pillow”) *Koma no watari*. The usual interpretation of *watari* in this phrase sees it as referring to the “area around” (*watari*) the place known as Koma 狛 (in southern Yamashiro province, modern Kizugawa 木津川 City, Kyoto Prefecture). However, in *waka* poems after the late Kamakura and early Muromachi periods, *Koma no watari* is instead interpreted as referring to a crossing (*watari*) of the Kizu River. The purpose of this paper is to clarify how the latter interpretation of *Koma no watari* that we find in such *waka* poems came into being.

The paper points out two contributing factors. The first is the prior existence at the location Koma of a famous crossing of the Kizu River called *Izumigawa no watari* 泉河渡. The word *watari* as it appears in poem 1058 of the *Man'yōshū* 万葉集 is interpreted as referring to this crossing. The late Kamakura and early Muromachi periods were an era when research into the *Man'yōshū* was particularly active. I argue that under the influence of the *watari* referenced in *Man'yōshū* 1058, *Koma no watari* and *Izumigawa no watari* came to be regarded as one and the same.

The second factor is the use of the *saibara* song *Yamashiro* in the Special Festival of Iwashimizu Hachimangū 石清水八幡宮 Shrine, as the song sung when dancers would run their horses from Settsu 摂津 (modern Osaka) to Yamashiro (modern Kyoto). The place Koma was in fact frequently used as a “pivot-word” (*kakekotoba* 掛詞) to reference *koma*, a homophonous word for horse. Given this, I conclude that in the context of the Special Festival at Iwashimizu, *koma no watari* was taken to refer to the horse crossing (*wataru*) the border between Settsu and Yamashiro, which in turn influenced the interpretation of *koma no watari* as the place where one would cross (*wataru*) the Kizu River.